図書と百年ー鈴木派の誕生（上）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000478

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

図書と百年ー鈴木派の誕生(上)

松尾　芳樹

明治初期の京都で、大きく躍進した画系に鈴木派がある。鈴木派は、鈴木百年、松年、松僊という三世代の画家とその門下によって作られた。その創始者である鈴木百年については、今日あまり知られていないが、彼は、近代へと向かう時代の転換期に、文人画家のひとつの生き方を示して、興味深い人物像を見せている。百年の父鈴木図書は、播州赤穂に生まれ、天文学易学に通じた儒者である。京都の土御門家に出仕し、絵も巧みだった。百年は、この図書の薫陶を受け、学問を修めるが、やがて絵画に対する生来の資質を伸ばして、画家の道を選んでいる。彼は、諸派を折衷した穏健な画風により多くの門下を集め、明治前半期における一大勢力となった。鈴木派の形成には、百年の人間性が大きく影響したようである。

主要項目：鈴木図書　鈴木百年　鈴木松年　鈴木派

Zusyo and Hyakunen - the Birth of the Suzuki School （Part Ⅰ）

Yoshiki Matsuo

The Suzuki school is one of the painting schools which made remarkable progress in the early Meiji Period in Kyoto. The Suzuki school was established by a three-generation family of painters-- Hyakunen Suzuki, Shonen Suzuki, and Shosen Suzuki - and their pupils. Although not much is known about the founder, Hyakunen Suzuki, he has an interesting profile in the setting of an example of a literary painter's life-style during the time of transition to the modern era. Tosho Suzuki, Hyakunen's father, was born in Bansyu Akaho. He was a Chinese philosopher and an expert in astronomy and the art of divination. He worked for the Tsuchimikado family in Kyoto and showed great talent in painting. Hyakunen studied under Tosho, but later developed his own natural talent in painting and chose to devote himself to painting exclusively. His painting style was moderate, combining the styles of several different parties, which attracted many pupils, and formed a notable group in the first half of the Meiji Period. It seems that Hyakunen's personality affected the development of the Suzuki school.

Key term : Suzuki Hyakunen, Suzuki Zusyo, Suzuki Syonen, Suzuki school

はじめに

日本絵画の世界では、中世も後半期になると、土佐家や狩野家のように血縁に基づく画系を強く意識するようになる。やがてそれは、様式の特徴をも含みながら、師承関係にまで拡大して、流派の概念を成立させる。

江戸後期以後、流派間の競合関係が強く意識されると、それぞれの集団は独自の見識に基づき活動するようになり、幕末明治期の京都にはこうした流派が幾つも存在した。中でも近代初頭に、新興ながら大いに躍進を見せたのが鈴木百年によって創始された鈴木派である。

鈴木派は百年、松年、松僊と三代にわたる血縁の中に生まれた門流である。閨秀画家として名を馳せた上村松園(1)が、鈴木派に名を連ねる画家の一人であることは、夙に知られるところで、その師鈴木松年(2)は、豪放磊落な気風を以って時代の寵児であった。しかし今日、この鈴木派という画系を顧みることは少なく、それは当然のように創始者である鈴木百年という画家の名を、馴染みの薄いものとしている。また、時に鈴木派について語る場合ですら、その話題は松年を中心としたものとなりやすく、鈴木派に対するこうした視点が適切なものかどうか、検証する機会を持つことすらない情況であった。

しかし、鈴木派と呼ばれる画家集団を見るとき、松年をはじめ、今尾景年(3)・久保田米僊(4)・畑仙嶺(5)など、主要な画家は百年その人の門人であり、彼の死後その結束が解体傾向にあったことを見れば、この流派の成立は終始、百年を中心としたものであった可能性が高い。鈴木派に目をむける手始めとして、その創始者である鈴木百年という人物への理解を深めてみたい。

＜1　鈴木百年の伝記資料について＞

鈴木百年は、極めて情報の得にくい画家である。近代の京都画壇について蘊蓄を示す神崎憲一氏をして、「百年に関しての記録は甚だ尠ない」(6)といわせたほどで、今日なお、その状況は変わっていない。では、百年がまるで評価に値しない存在であったのかというと、それは違う。

試みに、歌舞伎の評判記に見立てて安政年間に著されたと思われる『平安画家評判記』(7)には、以下のように記されており、当時の評判は決しておろそかではない。

上々　六百両　鈴木百年
　　三桝稲丸

此お人は元来お素人筋で御座り升かお骨折にて御修行なされます故追々上達で御座ります何分お器用にて當世の人氣を能呑込み諸方のよい所をとりてなされ升ゆゑ評判も能く何をなされてもしつかりと花やかに出来升此上乍ら御出精にて御修行なされたら此お人は今に大立者一方の御旗頭となられませふ當季若手の花方の親玉じやと申し升御美事にて感心々々

この「上々六百両」という評価は、『平安画家評判記』に名を連ねる56人の京洛画家の中で、中の上あたりのランクということになる。この当時、百年はまだ三十になるかならぬかという年齢であ

り、画家としての専門的な教育を受けていないことや、流派の後ろ楯もない経歴を考慮すれば、新進の岸竹堂(8)と肩をならべる扱いは、かなり高い評価を受けていた証しと見てよい。

こうした評価を受けた百年だから、その死後三十数年を経たにすぎない時点での神崎氏が、先のような印象を持ったとしても、なお風聞のようなものは遺っていたと思われるが、記述される機会はなかった。不幸にして百年の全盛期は、美術ジャーナリズムが未だメディアを確保していない時代である。

既に原田平作氏によって紹介された百年の評伝(9)を見れば、風聞・記事をまとめてわかりやすい。しかし、百年の伝記には、実は不明な部分がいまだ数多いことを、認識しておかなければならない。我々が今日知ることのできる、百年についての最も詳細な記録は、明治32年(1899)11月に発行された『京都美術協会雑誌』第89号に収録された「鈴木百年傳　附妻春香」(以下「伝記」)(10)である。これは、神崎氏に先行して早いものであり、その人物が分る資料として貴重なので、少し長いがここに全文を再録しておく。

鈴木百年傳　附妻春香

鈴木百年、幼名を甚之丞といひ、後に世壽と改む、百年は其號にして、晩年また大椿翁と稱す。父は圖書といひ、播州赤穂森侯の臣にして、大石氏の血族なりと。圖書天文の學に長じ、夙に京都に來り土御門家に出入し、終に天文博士權暦博士となる。其妻は同赤穂藩士大石某の女にて、常子といひ、文政十一年五月二十八日を以て百年を生めり。

百年幼にして岐嶷、群童と異なり。家學を父に受け、また圖畫を好み、近隣寺院の白壁門扉等、皆其墨痕の汚す處となる。年甫て七歳、近隣の兒童十數人と二隊に分れ、源平両軍の鬪戯をなす、而して百年は、一方の大將たり。鬪ふに及んで敵の破る處となり、且つ面部に負傷して流血淋漓、號泣止まず、父母百方之を慰諭するも、如何ともする能はず。會ま瀧澤馬琴京都に遊び、父圖書を訪ひ、幼童の號泣するを見て、其携ふ處の畫本を與ふ。百年之を得、涙を破て笑となし、翻弄措かず、其畫を好む此の如く實に天性に出づ。而して圖書は圖畫の天文學に必要なるを以、其嗜好に任し敢て之を制せざりき。

天保十二年、齢十四歳にして赤穂に趣むき、儒醫中嶋意庵に就て學ぶ。同塾の學生に大鳥圭介（今の樞密顧問官）あり、百年友とし好く、切磋研修、學大に進み、後塾頭に擧らる。

十六歳にして京都に歸る。父圖書は陰陽寮に出仕し、當時の畫家岸岱、岸連山、狩野永岳、小田海仙等と往来し、時に其家に延て雅會を開く。諸家百年の畫を見て敎ゆべしとなし、時々御繪所に誘なふて揮毫を見せしむ。百年一見して其畫を記臆し、家に歸りて之を寫す、其技の進むこと頗る速にして、大に諸家を驚ろかす。岸岱、岸連山最も其才を愛し、圖書に説くに畫家となさんを以てす。圖書また其器あるを知り、許して畫に從事せしむ。百年技益々進む、岸岱乃ち之を薦め、初て宮廷御用の御月扇を描かしむ。百年卽ち宇治川、及び佐野渡の二面を調進す。此時圖書初めて百年と稱せしむ。百年固と彫刻を善くす、因て即時に三万六千日の印を刻す。爾後百字に心を寓し、壽老人百人、三平二滿百人を描き、以て一對の百壽百福となす、祥瑞として需むる者甚だ多し。

弘化三年、御堂御殿、御杉戸の繪を仰せ付けられ、紅梅に鸚鵡と、白梅に鸚鵡哥を描く。同年皇太后宮宣下あり、大宮御所へ遷啓あらせらるゝにつき、御所より御進呈の屏風一双に、荒浪と日月の圖を描く。安政元年皇居御炎上御造營につき、御杉戸に月下の鹿、菊に鶉、杉に白鷹、枇杷花に狗子等を描き、同時に御襖地袋等の御用畫を勤むる事多し。文久元年和宮御降嫁の御土産品として、御屏風に泥引砂子地として、四季の草花を描き、維新後宮城の御杉戸に松に鳩の圖を畫けり。

是より先き百年は五畿内、及び紀州を歴遊して其名勝を寫し、殊に那智の瀑布、其他の瀑布は心を注ぎて寫生するもの多しと。明治二十四年秋田縣に遊び、病を得て東京の客舍に入り、遂に起たず、享年六十四歳。

百年の配は春香と號し、又畫技を弄す、子三人あり。長を百太郎、號を百僊と呼び、後松年と改む。次は千次郎、號を百翠といひ、季を万三郎、號を万年といふ。早く没す。門弟多き中、其名を著はせる者は今尾景年、久保田米僊、山田永年、櫻井百嶺、徳美友仙、畑仙嶺、井澤鶴年、海外夭*年等とす。

百年天資小心篤實にして、而も談話に巧みに、時に諧謔を弄す。また詩文を能し、筆札に至つては、殆んど龍躍鳳翥の概あり。平素好んで儒家詩人に交はり、江馬天江、神山鳳陽、富岡鐵齋等と相往來す。而して畫家に於ては落々合ふ處尠し。其詩一二首を擧れば、

題畫

多時坐瀑下。凉氣透巖中。欲洗心中垢。豈唯身上塵、

失題

西都數里趁闌晴。一杖雙鞋歩々輕。竹外梅花梅外柳。春風無處不鶯聲。

性酒を好まず、亦妓を愛せず。曾て藝妓の群隊を描かん事を請ふ者あり、百年筆を揮つて野狐の藝妓に扮せし圖を描き與ふ。又一歳配春香、兒百僊と共に櫻花を東山に賞し歸路祇園街一力樓に上る。春香豪放、雛妓を愛し、嫩紅嬌白隊をなして座に侍す。暫らくして乾娘は一盆の饅頭を捧げ出づ、これ百年の酒を嗜まず饅頭を好むを以てなり。而かも十數の雛妓は之を目し、嬌語憨態、各々其一を頒與せんことを請ふ。百年怒つて曰く、此饅頭は我喫せんと欲する者、汝等何ぞ聒々する此の如きと、勃然色を起して去る。

曾て百僊に語つて曰く、我畫を以て家を成すと雖も、尚ほ白人の凝固せしに過ぎず、汝に至つて初めて黒人たらんと。邦語其道に生疎なるを以て白人となし、其道に純熟するを以て黒人となす、蓋し鈴木派の創業を以て自ら居り、而して百僊をして守成拓開の功を收めしめんと欲するなり。而して百僊今や松年と號し、意氣豪宕、筆力奇恣、夙に後素界に雄視して、一世の大家と稱す、百年以て瞑すべし矣。

附　春香

春香は京都東中筋魚棚下る蓮光寺住職の女にして、百年に嫁す。性豪放にして、書畫を弄し、歌を細辻某に受け、詩を山田梅東に學び、後また林雙橋に師事し、餘技手拈の茶碗を製す、雅趣頗る饒かりしと。百年生平家事を省せず、春香專ら之を經營して内顧の憂なからしめ、また百年の畫を描く毎に、春香必ず其彩料を和し、風流追隨、人或は大雅の玉蘭を以て比する者あ

るに至る。明治　年没す。

（筆者注）*天の誤り

この記事は、百年没後８年を経た記事ではあるが、百年の亡くなった直後、明治25年（1892）１月６日の「日之出新聞」に、既にこの略伝の一部と酷似した内容 (11) が掲載されており、比較的信頼性は高いものと思われる。筆者は不明ながら、幼少期の逸話を含むので、近親者からの聞き書きによるものだろうか。

また、昭和9年に刊行された『大日本書画名家大鑑』に荒木矩が記したもの (12) は、上記の伝記を祖述するにとどまらず、壮年期の逸事も記して興味深く、これも全文を記して、「伝記」を補っておきたい。

百年〔画〕鈴木世壽、字は子孝、通稱は圖書、別に畫仙堂、東錦樓、大椿翁の號めり、父を圖書といひ摘星閣主人と號す、累世天文學を以て土御門家に仕ふ、百年幼より畫を好み、初め岸連山の門に入りて竹堂等と共に學び、また蕪村、呉春を喜び、後更に小田百谷、日根對山の風を學び、遂に自ら一格を成す、世に之を百年派と稱す、百年夙に家庭に文學を修め、長じて山田梅東の門に遊び、頗る詩をよくす、また貫名菘翁の書風を好み、京都畫家中、尤も書をよくすと稱せらる、京都畫學校に教鞭を執りし事あり、兼て狂詩狂歌を善くし狂名を志椀培といふ、明治二十一年播磨に遊び、臘月、鹽の名産地たる赤穂より、書を東都の菅原白龍に寄せし中に、「赤穂にて氣をやき鹽の年の暮さてゝゝからき時節なるかな」と、白龍返書の末に、小さき鼠と牛とを畫きて其の下に「子の年もちふゝゝいひて暮しけりゆつくり牛の春を迎へむ」と、その翌春、吾妻掬翠の許に「我が旅もあきなひなればだらゝゝとよだれのやうな長き丑どし」「のそゝゝと何處までゆく丑のとし金がもふゝゝもふからうかと」「うしといふ中へれの字をさしいれてうれしと思ふ春は來にけり」と、掬翠の返書に、「待てばこそもふ百年もたつおもひ君が來る間のおそき丑どし」と、百年は、陰陽頭土御門家の家臣なれは、平素兩刀を帶せり、一日、中島某の家に到る、主人頗る繪事を解し、藏幅を展し、清談、晷の移るを知らず、百年.畫に心を奪はれて、辭し去るに臨み刀を忘れて出づ、中島の家人、刀を携へて尾し來り、途上之を返す、百年赧然、路人失笑せりといふ、明治二十四年十*月二十六日東京に歿す、年六十七、京都東山一心院に葬る、長男百太郎松年と號し、畫を以て家を嗣ぐ、門下、今尾景年、久保田米僊、山田永年、海外天年、畑仙齡、西村秀岳、山圖**墨仙等その名最もあらはる

（筆者注）*十二の誤り　**山岡の誤り

この二つの略伝により、朧げながら、その人となりを知ることができる。詳細は上記の長々とした引用に委ねることにするが、これらの記述から、百年には、幕末明治期に活躍した人物特有の、滋味ある逸事が少なくないことがわかるだろう。画家としての才能よりも、こうした人物の面白さが喧伝されるのは、彼自身にとって幸か不幸か判断しがたいところだが、実際、百年という画家は、その人格において、興味深い存在であった。

しかし、彼の伝記を考察する際、まず最初に理解に苦しむのは、享年についての顕著な食い違いである。没年については異説がないところから、これは自ずから生年の違いを表すことになる。「伝記」では享年64歳で生年を文政11年(1828)と記しているが、享年67歳とする「大鑑」では逆算して生年が文政8年(1825)となる。現在書かれる百年の略伝においては、この文政8年説がとられるのが普通である。

どちらが正しいのか、即座に判断しかねるが、この文政8年説が広まる原因として考えられるのは、大正11年刊行の『京都名家墳墓録』(13)に紹介される百年略伝の存在である。名著として広まったこの書物は、先の「伝記」を除けば百年を紹介するものとして早く、享年を記す。しかし、「伝記」から23年、百年没後31年を経た略伝であり、信頼性が「伝記」に勝るとは思えない。昭和9年発行の「大鑑」は『京都名家墳墓録』に従ったと考えるべきだろう。

文政11年に生まれたとする部分や、天保12年に14歳で赤穂に行くとする部分は、先の明治25年1月6日付日の出新聞の記事にも記されており、むしろ「伝記」の文政11年説をとるほうが、状況としては信頼できるように思われる。しかし、同年1月25日に刊行された『絵画叢誌』第58巻に寄せられた記事(14)では享年を65歳としており、生年の曖昧さは逝去後まもなく始まったようである。

「伝記」にも書かれているように、百年は京都府画学校の出仕をつとめている。同校の後身である京都市立芸術大学には、その時提出した「履歴書」を写した資料(15)があるのだが、そこには生年が「天保十年丁亥五月廿八日生」と記されている。文政11年生まれとすれば、この年は12歳だから誤りと考えるほかない。重要な年号を誤る履歴書の信頼性が問われるが、捺印された資料であり、百年のもとから出たものであることは確実と思われ、判断が難しい。天保10年は己亥だから、この記述に錯誤があるのは間違いないが、直近の丁亥年は文政10年にあたるので、あるいは代筆者がいて、天保と文政という元号の錯誤が生じた可能性も考えられる。文政10年ならば享年は65歳となり、先の『絵画叢誌』第58巻の記事との関りがうかがえる。

安政2年(1855)に、鈴木百年は普賢延命菩薩の乗象の下絵を描く依頼を、京都頂法寺内の能満院から受けている(16)。その際、下絵の依頼をした僧大願は「鈴木百年先生之筆／此先生此年廿七八才位ニ見ユ」と端書しており、文政11年の生まれとするならば、まさに正確な所見であったことになる。大願が百年の実年齢について、情報を得ていたのかは分からないが、名声に比して思いのほか若いことが印象深く書き留めたのであろう。年齢に関する貴重な記事である。

鈴木家の過去帳には、百年の享年が記されていないと聞く(17)。百年の生年が曖昧となったことには幾つもの要因が重なったようである。確定する決めては今なお得られないが、情況から判断すれば、文政8年説を採用する根拠は薄弱であり、文政10年説を視野に入れつつ、文政11年説に従うのが妥当と考えている。

百年の墓は京都東山華頂山麓にある一心院(18)の墓地にある。眺めのよい高台に、百年の墓を中心に妻春香と三男万年の墓三基が東面して並び、小さな区画を形成している。百年墓は明治27年に長男松年によって建立されたもので、正面に「鈴木百年翁墓」背面に「明治二十七年第四月／孝子鈴木世賢謹建之」とのみ記される簡素なものである。

＜2．鈴木図書について＞

先の略伝を見れば、百年が近世の天文暦学家である鈴木図書の学殖を受けた教養人であったことがわかる。逸話からうかがえる文人気質が、父図書から受け継いだものである可能性は高い。鈴木図書の墓は東山の安養寺 (19) にあり、幸い百年の撰になる墓碑銘によって、その人となりを伝えている。原本は漢文だが、読み下しておく。

先考の諱は世孝、字は子養、姓は鈴木、通稱を圖書、號を星海漁翁という。播州赤穂の人。天文風水易術を嗜むこと蚤く、百家を渉猟して、妙理に通達す。壮歳、京師に入りて、司天家都講たり。人となり謙和温粹、物と牴ることなく、常に飲食を節し、善く羸質を保つ。老いに至り、精神衰えず。専ら五行之生尅を推し、以って人之窮通を説く。其言は爽やかならず、かつ福善禍悪之理を以って喩す。著書數十巻。名は四方に聞こゆ。文久壬戌閏八月四日家に終わる。年八十一。洛東圓山に埋骨す。私に謚して曰く曠達居士と。其一代の道徳は筆端の能く盡す所にあらざるなり。文久壬戌冬。孝子世壽謹んで撰す。門人中野熙政慎んで諱す。

先の「伝記」と碑銘からすれば、図書は播州赤穂の出身、赤穂藩森侯の臣で、大石内蔵助の血を引く大石家と縁戚関係があったという。また彼の妻は常子といって、赤穂藩士大石某の女というから親戚どうしの婚姻であったかもしれない。

短い記述ながら碑銘は、彼の温和な人柄と、禁欲的性格を伝えており、これは百年にも通じる性格といってよい。京都に登る以前に、天文学、易学を学んでいたことを記すが、師は誰とも知れない。彼がいつ頃上京したのか、明確にしていないが、文化8年に刊行された『導童六諭訓』には鈴木図書と鶴峰戊申 (20) による序があり、安部晴親 (21) の跋があるところを見ると、二十代も終わりの頃には在京していた可能性が高い。というのも、安部晴親は土御門家の当主であり、臼杵の国学者鶴峰戊申は京都に出て晴親に学んだとされるから、この三者が協力する場所として考えられる最有力の地は、京都なのである。

京都に出た図書は、土御門家の都講を務めたというので、この晴親のもとに出仕したことになる。都講というのは塾頭といった立場だから、土御門家の私塾において、早くから学識を認められていたのだろう。上京間もない京都において、彼の学識が重んじられたことは、文化10年の『平安人物志』(22) に早くもその名を表すところからうかがえる。その後も図書の名は『平安人物志』の常連となるので、簡単に整理してみよう。

文化10年（1813）　　32歳　『平安人物志　文化十年版』
　　儒家「鈴木世孝　字子養号南山　梅小路齋政館　鈴木俊平」
　　奇工「鈴木世行　再出」
文政5年（1822）　　41歳　『平安人物志　文政五年版』
　　儒家「鈴木世孝　字子養号南山　梅小路齋政館　鈴木俊平」

文人画「山水　鈴木世孝　再出」
星宿「鈴木世孝　三出」
天保元年（1830）　49歳　『平安人物志　文政十三年版』
儒家「鈴木世孝　字子養号南山　梅小路齋政館　鈴木俊平」
文人画「鈴木世孝　再出」
天保9年（1838）　57歳　『平安人物志　天保九年版』
儒家「鈴木世孝　字子養号南山　梅小路齋政館　鈴木俊平」
文人画「鈴木世孝　再出」
嘉永5年（1852）　71歳　『平安人物志　嘉永五年版』
儒家「鈴木世孝　字子養号南山　四条堺町西　鈴木圖書」
算数玄機「鈴木世孝　字子養号星斎　四条高倉西　鈴木圖書」
易学「鈴木圖書　再出」

碑銘にもあるとおり図書は、諱を世孝、字を子養といい、また南山、星斎、星海漁翁と号した。通称は俊平、図書は後の名である。碑銘には「鈴木図書翁」と名が刻まれているが、現在でも、彼の名の表記にはゆらぎがある。「国書人名辞書」では鈴木星海として項目をあげている(23)が、これは星海翁、もしくは星海漁翁の号を短くしたもので、必ずしも一般的ではない。また、荒木矩は「書画名家大鑑」に「鈴木南山」の項目(24)をあげているが、これが、同書の百年の項目中に記す鈴木図書と同一人物であるという認識はないようで、鈴木図書という人物がかなり漠然とした存在であり続けたことがわかる。

『平安人物志』に名を連ねて存在感を示した図書ながら、彼の位置付けはなかなか微妙である。その採録分野は儒家、奇工、星宿、文人画、算数玄機、易学とゆらぎが見えるが、基本的には儒家すなわち漢学者という認識であったのは間違いない。息子百年が山田梅東(25)に学ぶことに抵抗がないところを見れば、それは朱子学であったと思われる。当時の文人に多く見られる嗜みとしての画作は、余技を越えた水準と見られており、文人画の部に長期間安定した地位を保っているのが興味深く、百年への影響を見るのはたやすい。

一方、星宿とある天文学は、彼が務めた土御門家が司っていた学問だから、図書にとっては本業に関わる分野といえる。恐らく文化10年版の奇工という分類も、こうした特殊な知識に関るものであったろう。しかし、寛政9年(1797)の改暦が江戸天文方の手によって行われ、これに伴い、頒暦の権利も土御門家の手から離れていたから(26)、土御門家の天文学が当時どれほどの影響力を見せたかわからない。「伝記」には彼が天文博士・権暦博士となったことが書かれているが、それを裏付ける記録は遺されていない。天文博士は土御門家に、暦博士は幸徳井家に任じられる職である。幕末維新期の混乱の中で、特殊な事情があったかもしれない。いずれにせよ、図書が天文家として表舞台に立てた期間はあまり長くはなかったと考えている。

『平安人物志』において居所とされる梅小路齋政館は、八条御前北西に屋敷を構える土御門家が設けた家塾と思われ、正確な位置は分らない。梅小路村は、洛外にあたり、周辺には公家の所領が

多く、田園に囲まれた閑静な地域であった。土御門家の敷地内に天文台が設けられたことを考え合わせても、同じ敷地内にあったと考えるのが自然だろう。

碑銘には百年による著書の存在を記してはいるが、「国書総目録」には見えず、存在を確認できない。齋政館は出版事業も早くから行っていたらしく(27)、文政7年には同館から小島好謙・鈴木図書による「星図歩天歌」(二巻)が刊行されており、彼の著作の多くは斎政館によるものであった可能性が高い。

彼が仕えた安部晴親は天保13年(1842)に亡くなる。その5年後、弘化4年(1847)の序を持つ吉田援山の「皇都書畫人名録」には「書　四条堺町西　鈴木南山　名世孝字子養」とあって、書により文人ぶりを発揮しているが、住所は梅小路齋政館から四条堺町西へと移転している。土御門家が世代交代を迎える一方、鈴木家においても変化があったのである。

「伝記」にあるとおり、図書の妻常子が長男百年を生んだのは文政11年(既述の所見により文政8年説は採らない)5月28日のことと思われる。場所は四条堺町西とする伝もあるが、『平安人物志』に見る限り、天保9年(1838)まで居所は梅小路斎政館である。ただ、鈴木松年の語るところ(28)では、図書は赤穂から上京した後、東山双林寺内長喜庵の傍らに家を構えたといい、百年が子供の時木登りした木もそこにあるといっているので、この長喜庵近くの家で生まれたと考えるのが正しいようである。ちなみに長喜庵はいわゆる東山書画会の会場となった所であり、こうした環境は百年の資質形成に大きな影響を与えたと思われる。図書は東山の自宅と梅小路の勤務地との二重生活を送っていたことになるが、これは夜間の観測を必要とする天文家という職業を考えれば理解しやすい。

天保13年(1842)に図書は還暦を迎える。この頃から、図書に代わって、百年が土御門家に出仕するようになったと考えられるので、土御門家と鈴木家の世代交代は前後したことになる。「皇都書畫人名録」は書画により百年をも収録(29)するが、四条堺町西への転居とともに、その号を摘星樓と記しており、図書と百年の交代を物語る証しとなるだろう。

こうした暮らしぶりの変化は、嘉永5年版『平安人物志』にも表われており、図書は算数玄機、易学を持って採録されている。職を辞しても、技芸を以ってなお存在感があった。碑銘によれば、晩年になっても聡明さを保ち、易を行っていた様子がうかがえ、百年が頭角を表わすこの時期、悠々の隠居暮らしであろう。やがて文久2年(1862)閏8月4日図書は四条堺町西の住居で亡くなる。享年は八十一才。その年の冬に洛東の安養寺に埋葬された。門人である中野熙政によって曠達居士と謚号された。　(続)

[付記]　本稿をなすにあたって、鈴木松僊の孫である鈴木元彦氏、同じく松僊の孫であり日本画家である久保吉郎氏、太田家現当主である太田明氏の三氏には、様々なご教示と、資料提供の便宜を受けました。これらの資料がなければ本稿が形をなすことはありませんでした。ご厚意に深く感謝いたします。

注

（1）上村松園（1875-1949）＝　四条通御幸町西入るに生まれる。本名津禰。鈴木松年に師事し明治20年京都府画学校に入るも中退。同26年から幸野楳嶺に師事し、28年楳嶺没後竹内栖鳳に師事した。美人画を得意とし、昭和16年帝国芸術院会員、同19年帝室技芸員となり、同23年文化勲章を受章。

（2）鈴木松年（1848-1918）＝　鈴木百年の長男として四条堺町西入るに生まれる。名は世賢、字は百僊、幼名百太郎。別号に東錦樓、老龍館、天龍叟がある。画を鈴木百年、詩を山田梅東に師事する。明治10年第1回内国勧業博覧会出品。明治13年京都府画学校出仕、同19年三等教員となり、同21年退任する。同15年第一回内国絵画共進会で褒状。同17年第二回内国絵画共進会で銅賞。同18年第四回京都博覧会で妙技賞銅牌。同23年第三回内国勧業博覧会で三等妙技賞。同年京都美術博覧会で二等銅牌。同年日本美術協会絵画展覧会で銀牌。同26年シカゴ・コロンブス記念万国博覧会出品。同28年第4回内国勧業博覧会で妙技三等賞。同29年日本絵画共進会で1等賞。同33年パリ万国博覧会第二部日本画で銅牌。同年第9回日本絵画協会共進会で銀牌。同43年日英博覧会の日本画に出品。明治25年森寛斎・谷口靄山・岸竹堂・望月玉泉らと古画研究の小春会を結成。明治31年相国寺瑞春院襖絵制作。同32年天竜寺法堂天井画制作。同38年三千院客殿襖絵制作。同42年延暦寺滋賀院二階書院襖絵制作。明治40年に開設した文展には出品しなかった。大正3年永観堂に画仙堂を上棟。洛東長楽寺に墓がある。弟子に海外天年、長井一禾、梶野玄山、斉藤松洲、上村松園、小西福年、岡田播陽、高橋龍僊らがいる。

（3）今尾景年（1845-1924）＝　京都衣棚二条の悉皆業に生まれる。名は永勸、字は子裕、幼名猪三郎、別号聊自楽、養素斎などがある。はじめ浮世絵師梅川東居に学ぶが、明治6年に鈴木百年に入門。一時友禅図案にも従事した。明治13年京都府画学校出仕となり、21年嘱託教授となってまもなく退任。如雲社に参加しており、28年にその後継団体としての京都後素協会の設立にともない委員長となる。15年第1回内国絵画共進会で銅賞。同17年第2回内国絵画共進会で銅賞。同26年シカゴ万国博覧会で名誉賞牌。同33年パリ万国博覧会で銀牌。同37年セントルイス万国博覧会で金牌。同44年ローマ万国博覧会で二等。明治37年帝室技芸員となり。40年開設した文展の審査員を大正2年までつとめ、大正8年帝国美術院開設にともない、会員となった。明治42年南禅寺法堂天井画、大正2年青山御所杉戸絵を制作している。写生に基づく花鳥画を得意とし、「景年花鳥画譜」（明治24年）「景年習画帖」（同28年）「養斎画譜」（同33年）などの木版画譜も刊行している。大正13年10月5日京都で逝去。洛東南禅寺正因庵に墓がある。門下に木島桜谷、上田萬秋、梅村景山、松村梅叟らがいる。

（4）久保田米僊（1852-1906）＝　京都錦小路東洞院の料理屋に生まれる。名は満寛、幼名米吉。慶応3年鈴木百年に師事する。明治11年幸野楳嶺・望月玉泉らとともに、京都府に画学校設立の建議を行い、明治13年に開校した同校に、同21年に出仕、22年には教員となり、まもなく退任している。明治15年第1回内国絵画共進会で銅印。同17年第2回内国絵画共進会で銀章。同19年京都青年絵画研究会を結成。同20年皇居宮殿造営にあたり皇后宮化粧間天井絵及び杉戸絵を制作。22年パリ万国博覧会で金賞を受け、渡仏して博覧会を京都日報に画報している。23年には京都美術協会設立に力を尽した。明治24年東京に移り「国民新聞」に入社。明治27年の日清戦争では、従軍記者として戦争報道に関わった。明治30年石川県立工芸学校教授となるが、眼病により退職。33年に失明してからは錦鱗氏の名による俳句や評論を行った。「画法大意」（22年）「米僊画談」（33年）などの著書がある。門下に息子の久保田米斎・久保田金僊や田中一華・椎名仙山がいる。

（5）畑仙齢（1865-1929）＝　禁裏警護の武士畑家の嫡男として京都に生まれる。名は経長、字は子益、別に半象外史といった。鈴木百年に師事した。明治16年に京都府画学校の出仕に命じられ、翌17年第二回内国絵画共進会で褒状を受けた。明治24年に東京に移り、日本青年絵画協会の結成に参加、その後、同31年の日本画会の結成にも参加し、日本美術協会第一部委員として活躍。同33年パリ博覧会に出品。40年には正派同志会結成にあたり幹事となった。明治30～35年まで富山県美術工芸学校の教頭を務め、同44年には中国に渡り、各地の遊歴を果たし、

南画に一家をなした。弟子に陣内松齢、永松梅齢、小林竹齢、小山岳齢がいる。

（6）神崎憲一『京都に於ける日本畫史』（昭和4年／京都精版印刷社）37頁。

（7）『京都美術協会雑誌』第40号（明治28年9月）11-25頁「平安画家評判記」。神崎憲一前掲書10頁。

（8）岸竹堂（1826-1897）＝彦根に生まれる。名は昌禄、字は子和、通称八郎。中嶋安泰・狩野永岳に就き、岸連山に学んでその養子となる。京都御所御常御殿の襖絵制作に携わり、明治23年第三回内国勧業博覧会で二等銀牌受賞を受けた。弟子に西村五雲らがいる。

（9）原田平作『幕末明治京洛の画人たち』（昭和60年／京都新聞社）80-101頁。

(10)『京都美術協会雑誌』第89号（明治32年11月）11-13頁。「藝苑叢話」にあり。

(11) 鈴木百年翁の傳　舊臘東京の客舍に歿故せし京都の畫匠鈴木百年翁は鈴木派の一流を立たる近來の名家なれば其の經暦を聞くが儘登録せんとす翁は名は世壽號は百年といひ後年大椿翁とも自稱し幼名を甚之丞といふ父は圖書といふ播州赤穂森侯の臣属にして大石氏の血族なりと圖書天文の學に長じ夙に京都へ來り土御門家へ出入し終に天文博士權暦博士となり四條堺町東にて日本周易の総督と稱せり其妻は同赤穂藩士大石某の女常子といひ文政十一年五月二十八日を以て翁を生めり翁幼にして岐嶷群童と異なり家學を受け又圖畫を好む嬉戯の間寺院の白壁門扉等へ落書するを快樂の第一とす圖書其遊伎の圖畫なるを喜ぶ這は陰陽家に於て圖畫の必要あればなり故に敢て其遊伎を制せず放肆其好みに任せり翁が圖畫に熱心なるは嘗て悪戯の際屋上より轉び落つ痛苦啼泣とゞめず其母之に筆を與ふれば啼泣頓に止んで嬉々筆を弄す又年甫めて七ツ多數の小兒と源平の戦闘をなす翁は一方の大將たり敵剛くして向ふべからず忽ち攻撃せられ其面部をつよく撃れて負傷し鮮血漓々號泣して其失敗と痛苦を訴たふ父母慰諭すれども聞かず百物其號泣をとゞむるものなしたまゝ瀧澤馬琴翁京都に遊び父の家を訪ふに遭ふ幼童の號泣を見て其携ふ處の山水人物の畫本を與ふ翁之を得て欣然たちまち其號泣をとゞめたりと以て翁の畫伎を好むは其天性に出るを知るべし天保十二年翁十四歳にして赤穂に之き當時の儒醫中嶋某に學ぶ翁と同年の塾生に大鳥氏あり（後に圭介と稱す則ち目下の清國全権公使なり）翁の中島塾に遊ぶや多年ならずして塾頭に擧られ大鳥氏と其の才學を競へり

赤穂は大石氏にして其名あり淺野侯の變後森侯之にかはれども大石氏の血族殘れり而して元禄以來世に聞ゆる人なし鈴木氏父子及び大鳥氏を出して良雄以來の人物を出せりと其地に評せし（未完）

(12) 荒木矩『大日本書画名家大鑑』（昭和9年／大日本書画名家大鑑刊行会）（昭和50年／第一書房）735頁。

(13) 寺田貞次『京都名家墳墓録』（初版大正11年10月／山本文華堂）（復刻版昭和51年12月／村田書店）364頁

(14)『絵画叢誌』第58巻（明治25年1月）4丁裏。「鈴木百年翁逝く　翁は京都の名家去年東京に來り池の端に住せしか後白龍山人と共に羽後秋田傳神畫會の請ひにより同地に趣き歸途病を得て還り去年十二月廿八日東京に於て卒す年六十五」

(15)「創立以来旧職員履歴書綴」（原本の所在は現在不明。履歴書は捺印されており画家から提出された原本であったと思われる。電子複写による写が遺される。）

履歴書

京都府下下京区第拾二組立賣西町

鈴木百年＜印＞

名世寿又号大椿翁

天保十年己亥五月廿八日生

一　父　鈴木図書　星海翁　天文家

一　無師

一　遊歷地名

大和　丹波　丹後　若狭　美濃　飛騨　伊勢　尾張　参河　遠江

駿河　相模　武蔵　下総　下野　紀伊

一　明治十一年京都府博覧會出品ノ画ニ妙技賞牌ヲ拝受ス

一　明治十三年六月十日京都府画学校出仕拝命

一　明治十五年五月十一日京都府画学校画学講演擔當当申付ラル　」

京都府下下京区第拾二組立賣西町

第三区　鈴木百年＜印＞

鈴木派　又号大椿翁

第壱號　（設色／密画）宋魏野図　絹本　（幅二尺／長五尺）

第弐號　（水墨／疎画）漁夫図　紙本　（幅二尺／長五尺）　」

(16) 京都市立芸術大学芸術資料館所蔵「田村宗立旧蔵六角堂能満院仏画粉本」のうち「象図」（整理番号11函18号）。

(17) 鈴木家の過去帳については鈴木元彦氏のご教示を受けた。

(18) 京都市東山区林下町にあり。華頂山の麓、智恩院に隣接する浄土宗捨世派本寺。山号を群仙山といい称念上人を開基とする。墓所には塩川文麟の墓もある。

(19) 京都市東山区円山町にあり。円山公園の東端、長樂寺（鈴木松年墓あり）の北にある時宗遊行寺末。山号を円山といい、寺伝ははじめ最澄の創建の天台宗寺院とする。墓所には横山清暉の墓もある。

(20) 鶴峰戊申（1788-1859）＝豊後臼杵八坂神社神官の家に生まれる。文化元年上京、綾小路俊資に和歌を、村上円方らに国学を学ぶ。帰郷後再び上京し安部家の塾に学び、大坂に移った。天保3年江戸に移住し究理塾を、同9年海鴎社を開き、水戸の和書編集所に出仕した。

(21) 安部晴親（1787-1842）＝土御門泰栄の次男だが、寛政十年に位記を返上した兄秦胤の養子となり家督を継いでいる。従二位に昇る。

(22)『平安人物志』は明和５年に初めて出版された京都の学者及び芸術家の人名録で、安永４年版、天明２年版、文化10年版、文政５年版、文政13年版、天保９年版、嘉永５年版、慶応３年版と合計９冊が刊行された。姓名、字、号、居所の他通称も記しており、諸国から京都に遊学する者への便宜をはかる目的があったという。明和５年版刊行当所より画家の項がある。

(23)『国書人名辞書　第二巻』（平成７年／岩波書店）611頁。

(24)「南山（画）鈴木南山、名は世孝、字は子養、通称は俊平、京都の人、南宗画をよくす、天保頃」とあり、おそらく『平安人物志』からの採集であろう。

(25) 山田梅東（1797-1876）＝名は敬直、字は其正。通称左一。代々男山八幡宮の神職の家に生まれ、松本愚山に師事して朱学を学んだ。天保13年に引退し、東洞院綾小路に居住、慶応2年近江膳所藩に招かれた。

(26) 渡邊敏夫『日本の暦』（昭和59年第二版／雄山閣）167頁。

(27)『京都書肆変遷史』（平成６年／京都府書店商業組合）155頁によれば、斎政館の開業期間を元文年間から弘化年間（1736－1847）としている。

(28)『京都美術』第43号（大正６年９月）鈴木松年「長喜庵の展観」１頁。

(29)「畫　北宗　同　并書　四條堺町西　鈴木百年　名世壽字子康　号摘星樓」とある。